

Österreichisches Museum
für Angewandte Kunst, Vienna

ウイーン国立工芸美術館

当館収蔵の芝・増上寺将軍徳川霊廟建築物断片について

ウィーン国立工芸美術館東洋美術部
ヨハネス・ヴィーニング

1 作品の収蔵と研究の経緯

一連の建築部材が、ハインリッヒ・シーボルトによつて、他の無数の作品とともにオリエント博物館（一八七三年ウィーン万国博覧会）のあとをうけて設立されたに寄贈されたのは一八九二年のことである。それらには一括して所蔵番号16326が当てられ、登録簿の記載には、次のように短く記されているのみである。「東京 芝の寺より 一七八〇年頃の寺院」。

その記念物的な価値が認められ、一九〇五年、現在の工芸美術館での展覧会「古き日本の芸術」展の際、初めてこれらの建築部材が展示された。想像をまじえて各種の部材が組み立てられ、内部には、彫刻や絵画、中国絨毯や棕櫚の葉などを使つて、さらに想像力あふれる飾り付けがなされた。

この展覧会のためのカタログの記載も、所蔵品そのものに関してにはあまりにも情報が少ない。将軍の墓所と芝の寺の周りには一連の小さな寺院が建ち並び、それらの寺院では、毎年決まった日に、将軍とその夫人たちの供養のための法要が催された。外国人がこの寺院を訪れることは、一八六八年の革命（明治維新）まで禁じられていた。革命後、この寺の一つが売りに出された」とあるのみである。

一九〇七年にオリエント博物館が閉館した後、コレクションの大部分はウィーン国立工芸美術館に移され、その時、これらの建築部材も当館に収められた。その後、十九世紀後半のものと考えたまま、この建造物の年代の割り出しは、それ以上詳しくなされなかつた。近年、この建造物への関心が復活し、歴史的資料に基づいてその歴史と意義が再び追跡されてきたのである。

2 保存されている部分

保存されている部分のみで建物全体を再現することはできない。あくまでも、取り壊された建物のごく一部のみが蒐集された、という印象を受ける。

現在保存されている部分のなかで中心となるのは、狩野派風の唐獅子を描いた巨大な二枚の板絵（原色図版第3・4図）と、重厚な木製の観音開きの扉であり、後者は二枚の大きな扉と四枚の小さな扉が組み合わされ、表面には金箔、裏面には赤と黒の漆が塗られている。また、すべての扉に、徳川家の紋が入れている。

その他には、花模様や天女・龍・鳳凰などが浮彫や透彫で表された欄間や壁画の飾り板類が大量に残っている。梓木の部分に徳川家の紋を入れた金具を伴っているものもあるが、その後取りはずされたものも多く、大量の金具が別の箱に収めて保存されている。

3 芝

芝の徳川家霊廟は、寛永九年（一六三二）、三代将軍家光によつて、彼の祖父、すなわち初代将軍家康が菩提寺とした芝・増上寺の境内に造営が始められた。家光は、将軍家のために合わせて三つの廟を造営させた。日光には祖父家康と自分のための廟を、また、祖父を祀る神社「東照宮」のある芝には父である二代将軍秀忠の廟を建てさせたのである。さらに、上野には巨大な寺院・寛永寺と墓所のための礎石を築かせた。

四代将軍家綱、五代将軍綱吉の墓所は上野に置かれ、六代将軍家宣のとき再び芝に墓所が置かれるようになった。

その後の動きを含めて歴代将軍の墓所を整理すると次のようになる。

日光……初代、三代

上野……四代、五代、八代、十代、十一代、十三代

芝……二代、六代、七代、九代、十二代、十四代

（注）十五代は神道のため、いずれにも属せず。

徳川将軍家の墓所には、墓（宝塔）とは別に霊廟が設けられていて、昭和五年（一九三〇）、上野・寛永寺と芝・増上寺の全遺構が国宝に指定され、昭和九年（一九三四）に、実測図や写真を盛り込んだ詳細な報告書が出されている。その建物は、残念なことにごく一部を残して昭和二十年（一九四五）の戦災で焼失してしまいが、今日我々は、前記の報告書や『戦災等による焼失文化財』（文化庁編）などから、昭和初年に残っていた建物や建築装飾の概要を知ることができる。

ウィーンに渡ったものが芝の誰の霊廟からのものであったかを特定するには、まず昭和初期まで残っていたものの確認から始めねばならなかつた。紙数の関係で途中の詳細を省き結論だけを述べると、増上寺にあった将軍の霊廟は、二代将軍秀忠の台徳院霊廟、六代将軍家宣の文昭院霊廟（十二代家慶、十四代家茂も合祀）、七代将軍家継の有章院霊廟（九代家重も合祀）で、戦災で焼失するまではかなりの部分が残っており、ウィーンの唐獅子図板絵は少なくともこれらの建物からのものではない。

それでは、ウィーンの唐獅子図や徳川家の紋をつけた建築部材は、芝のどの「寺」からのものかというのだろう。増上寺には将軍以外の人の霊廟があったのだろうか。

我々は、かつて本堂の裏手に「清揚院」の宝塔と霊廟が存在したことを示す天保年間（一八三〇～四四）作成の増上寺建造物配置図、明治初年作成の芝公園内配置図、その造営規模を示す江戸期の図面、さらにいくつかの記述等に接することができた。

この清揚院靈廟は、三代將軍家光の第三子で、六代將軍家宣の父に当たる綱重(二六四〇〜七八)を祀ったもので、家宣によって造営された。その規模は、江戸期に作成された図面によると、他の將軍靈廟とほぼ同規模であったことが知れる。しかし、その建物は、幕末・明治初期にはかなり破損していたことが、『増上寺史』や『市史稿』などの記述に散見され、明治三十年(一八九七)に発行された『新撰東京名所圖會』の鳥瞰図などでは完全に消えている。おそらくは明治の初期に、破損もあって徐々に取り壊されていったものと思われ、ウィーンの唐獅子図や建築部材は、その一部なのではないかと思われる。

4 修復

この靈廟の元の姿を思い描くには、日光・輪王寺にある三代將軍の靈廟や、戦前まで残った芝の靈廟の写真、なかでも清揚院靈廟の三年後につくられた六代將軍の靈廟の写真が有効である。これらはすべて、將軍の靈廟に典型的ないわゆる権現造りの建物である。それぞれ本殿と拝殿という二つの建物からなっており、それらは「相ノ間」と呼ばれる屋根のついた廊下でつながれている。拝殿は、諸侯の参拜に使用されたもので、その内部には、唐獅子を描いた六枚の板絵が、「相ノ間」への入口の左右に三枚ずつ配されていた。「相ノ間」を進むと本殿に至るが、ここには亡くなった者の縁者、すなわち將軍家の人たちだけしか入ることができなかった。

日光にある三代將軍(すなわち綱重の父)の靈廟の「相ノ間」を見て、私は、ウィーンに伝わる扉も、かつて清揚院でこのように使われていたのではないかと想像することができた。すなわち、大きな二枚の金色の扉は、正面に据えられて奥殿へ立ち入る者を阻み、二つの小さな二重扉は、その左右で外面と接していたのである。

ウィーンの建築部材には、六枚の扉のほか、二枚の獅子の絵や透彫・浮彫の施された様々な飾り板など、この靈廟の主な部分が含まれている。どのようにしてハイブリッド・シーボルトがこの遺産を手に入れたか、という問いに答えることは難しい。しかし、彼は徳川家、特に最後の將軍(慶喜)と昵懇(じつこん)であったこと

とが知られており、美術品だけではなく家具を含めた多くの作品を手に入れる情報や手蔓(てづな)を持っていたと思われる。少なくとも、「芝の寺院」の断片部分を獲得するには、それが必要だった

ウィーン国立工芸美術館所蔵の扉



取りはずして別納されている金具

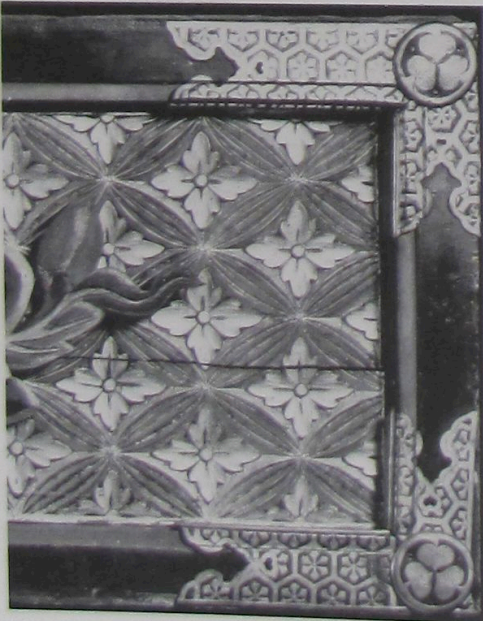


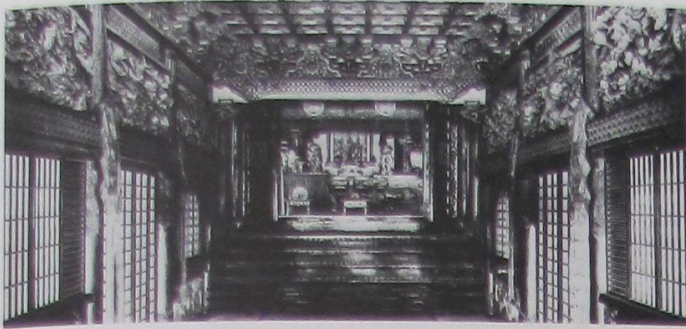
はずである。なぜなら、徳川家靈廟は一般公開されるようになった後も、徳川家の所有にかわりなかつたのだから。

ウィーン国立工芸美術館所蔵の建築部材

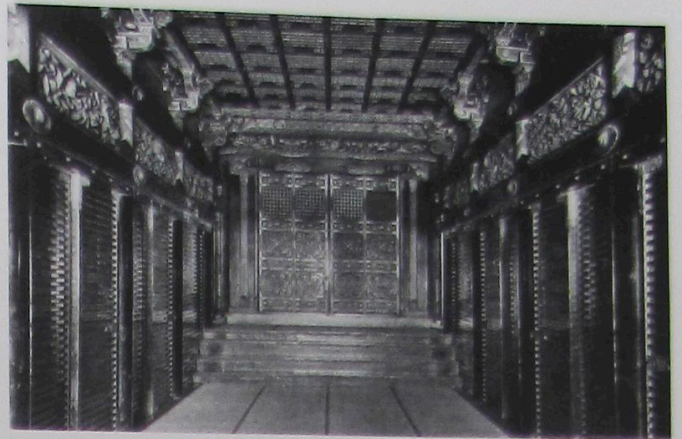


徳川家の紋が入った金具

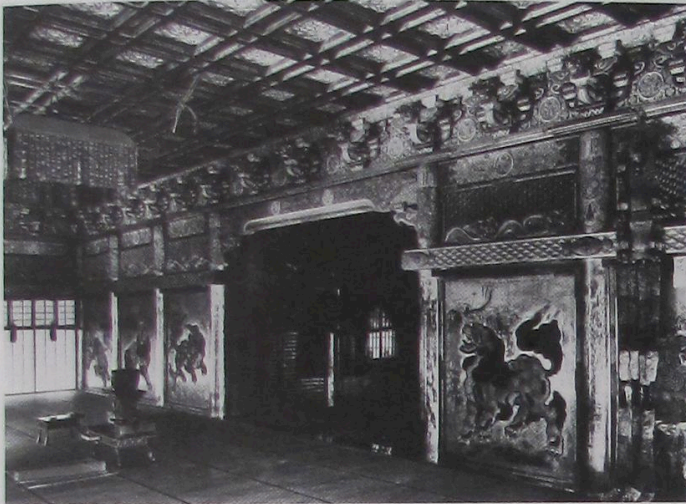




文昭院（六代將軍家宣）霊廟相ノ間内部（『戦災等による焼失文化財』より）



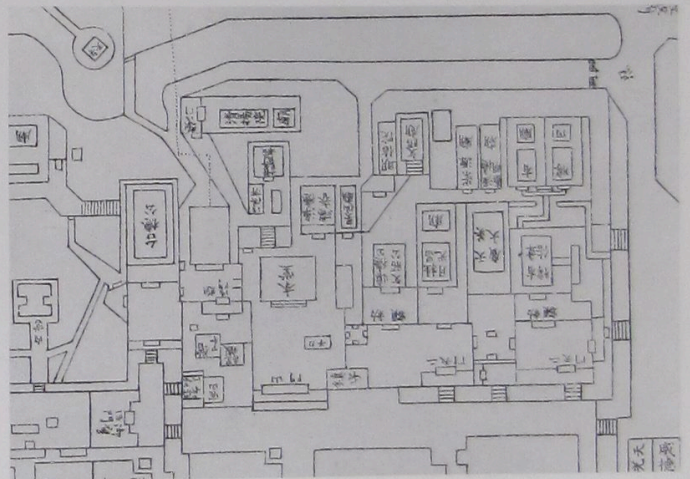
台徳院（二代將軍秀忠）霊廟相ノ間内部（『戦災等による焼失文化財』より）



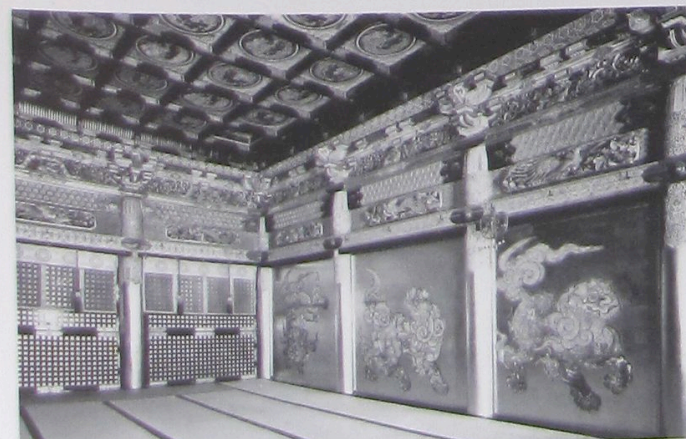
有章院（七代將軍家継）霊廟拜殿内部（『戦災等による焼失文化財』より）



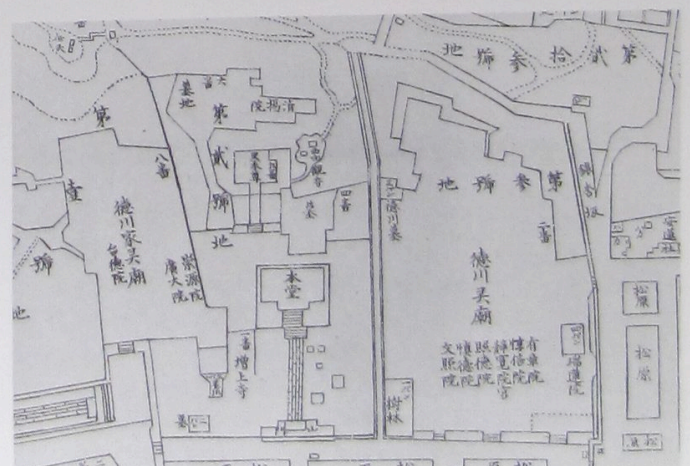
輪王寺大猷院（三代將軍家光）霊廟 拜殿・相ノ間・本殿



天保年間（1830～44）に製作された芝・増上寺建造物配置図



輪王寺大猷院（三代將軍家光）霊廟拜殿内部



明治初年の「芝公園地現今調製之図」より